

# 「対話的な学び」とは

(参考資料 1)

子ども同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深めること。

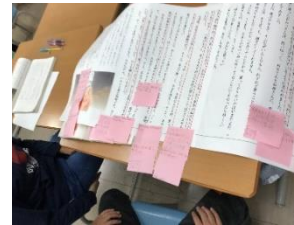
対話的な学びとは、学習の形態のことではありません。

グループ学習やペアトーク等の話し合いの活動だけではありません。



- ◇先哲との対話
- ◇作者との対話
- ◇自己内対話
- ◇過去や未来の自分との対話
- ◇各種のツールを活用した対話等、様々な場合が考えられます。

【付箋を使った対話】



考えを付箋に書き、班で回して読み合うことで、様々な考えを知ることができます。グループによる対話と同じ効果が期待できます。

【ICT機器を使った対話】



自分の考えを書いて、伝え合うことができます。声を出さなくても、視覚的に伝えることができます。

【作者との対話】

宮沢賢治さんの本では、他にも生と死の対比に関わる作品が多かったので、賢治さんは、「命」や「真剣に生きる」ことを大切にしているのだと思いました。

国語の授業後の児童の振り返りです。宮沢賢治の考え方や生き方を想像しながら書いていることがわかります。

【過去の自分との対話】



自分のノートペラペラとめくりながら、課題の解決に取り組んでいます。

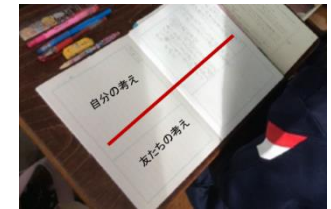
前時での学びを確認したり、見直したりすることは、過去の自分と対話をしていると言えます。

【ハンドサインを使った対話】



グループにならなくても、声を出さなくても、自分の立場や意志を伝えることができます。

【ノートによる対話】

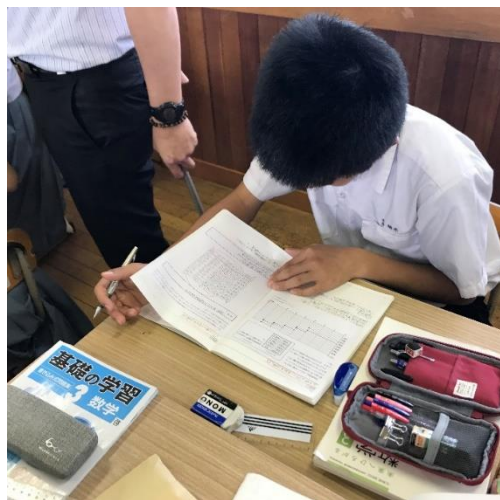


上段に自分の考えを書き、下段に友達のことを書き、比べています。これも友達との対話と言えます。比べることにより、自分の考えを広げ深めることが期待できます。

# ペアやグループでの活動を設定しにくい状況の今、より求められる「教師の説明する力」

(参考資料 2)

## 【過去の自分との対話】



自分のノートをペラペラとめくりながら、課題の解決に取り組んでいます。

前時での学びを確認したり、見直したりすることは、過去の自分と対話をしていると言えます。

単元の4時間目では、生徒同士の対話や写真のような自分との対話が多く見られました。

このような授業が実現できたのは、1～3時間目の授業において、必要な知識や技能を確実に身に付けているからです。

1～3時間目の授業では、教員が説明する場面がやや多いと思いますが、4時間目の対話中心の学習展開の基盤となっています。

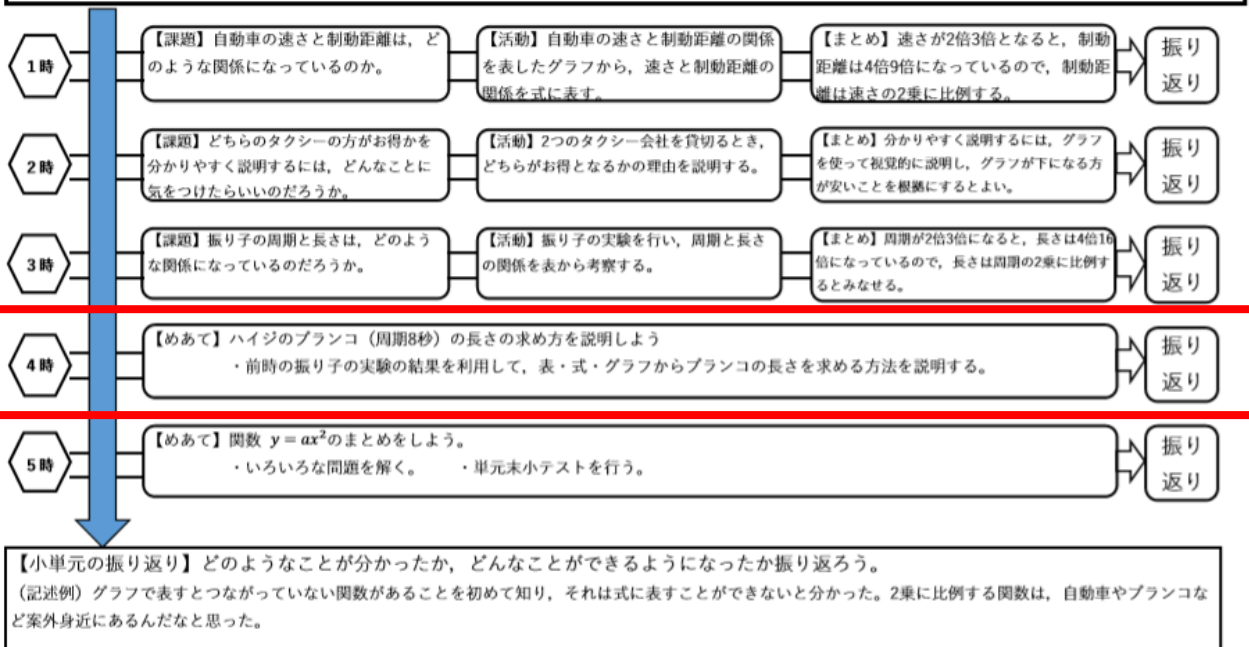
単元や題材のまとまりの中で、以下のことを、どこに設定し、どのように組み立てるかを考えることが大切です。

- ・学習の見通しを立てたり振り返ったりする場面
- ・対話によって考えを広げたり深めたりする場面
- ・子どもが考える場面と教員が教える場面

## 小単元計画【第3学年 いろいろな事象と関数】

【小単元のねらい】身のまわりの関数  $y = ax^2$  の事象について、具体的な事象の中から2つの事象を取り出し、それらの変化や対応を調べることを通して、関数関係を見だし、考察・表現できるようにする。

【小単元のめあて】身のまわりの事象から関数関係を見つけ、その関係を利用して問題を解決しよう。



教師の説明する力や話す力を磨きましょう。

ペアやグループでの活動を設定しにくい状況では、教師の説明するスキルがより重要になります。

聞いている間に疑問や問いをもたせるような話し方、意図的な問の取り方、効果的な教材・教具の提示、筋道の分かる明快な説明のスキルを磨いて授業に臨みましょう。

